

地域資源（ウバメガシ）の持続的な利用に向けて

1 テーマの趣旨・目的

高知県西部に位置する幡多郡大月町は、町土面積の78%が森林であり、人工林率は35%で他の市町村よりも天然林の比率が高く、ウバメガシも多く分布しています。

同町内では、この地域資源（ウバメガシ）を活かした産業づくりを目指し、地元有識者の協力のもと平成22年に大月町備長炭生産組合を発足し、備長炭の生産活動を開始しています。同組合は、発足から現在までに20～30代の若者や移住者を生産者として育成するなど、堅調な運営基盤のもとで雇用創出にも大きく寄与しています。

ウバメガシは、備長炭の原木として需要が高く、大月町のみならず県内各地でウバメガシの皆伐面積が増加しています。しかし、伐採後の適切な更新が行われない場合、将来的に原木不足が懸念されます。

この課題について当事務所では、大月町備長炭生産組合や地元関係者に加え、県の試験研究機関と連携し、持続可能なウバメガシ資源の維持確保に取り組んできましたので、その内容を報告します。

2 現状及びこれまでの取組の成果・課題

(1) 現状及び取組内容

ア) ウバメガシ原木の確保について

・「針葉樹人工林の皆伐後の原木林造成」(大月町有林)

ヒノキの伐採跡地で下層植生が広葉樹である町有林にて、植栽したウバメガシの成長と競合植生との関係を調査するため、ha当たりの植栽本数の違い及び下刈りの実施別にプロットを設置して比較しています。また、同様の調査をウラジロ（シダ）の群生地でも実施することとし、今年新たにプロットを設置する計画です。

・「広葉樹薪炭林での原木林造成」(大月町内国有林)

ウバメガシ大径木の萌芽更新の可否と適切な管理方法の検討のため、大月町内にある国有林の一部を伐採しました。今後、経過を観察していきます。



大月町有林の伐採跡地



プロット設置状況

イ) 学生が参加する苗木づくりと植樹活動について

大月町備長炭生産組合は独自の活動として、大月町内の小学校4年生を対象に製炭業の授業を実施しています。

この授業では、幅広い年齢の子供たちが町の産業の一部である製炭業に直接触れる機会を作りたいという同生産組合の強い思いから座学と窯出しの見学を行ってきましたが、地域資源の維持確保の観点から、ウバメガシの苗木づくりや植栽を高校生と小学生の合同で実施しました。

ドングリから苗木を育て、それを山に戻す植樹活動を行っているこの一連の取組は、製炭学習とあわせて子供たちへの環境教育としてプログラム化されています。

また、これらの活動は「こうち山の日」の啓発活動に位置づけられており、幡多林業事務所職員も多数参加し苗木の植え付けやコンテナ苗の育成に協力しています。



ウバメガシ苗木の植栽



コンテナ苗の作成

なお、コンテナ苗の育成のサポートとして、以前から検討していた自動灌水装置を設置しました。これによって、人役と作業時間を要する従来のホースによる手灌水からの効率化が図られました。

(2) 成果

ア) ウバメガシ原木の確保について

ヒノキ皆伐跡地の植栽地(町有林)及びウバメガシ大径木の萌芽更新地(国有林)共に生育調査はこれからであり、結果が確認できるまで時間を要するため、引き続き実施していきます。今後も、試験地での下刈りの有無、林床の状況、植栽密度によってウバメガシの成長にどのような影響があるかなどを検証して、施業体系の確立に取り組みます。

なお、備長炭生産組合へのフォローアップ当初から取り組んできた択伐については、これまでの指導や「択伐」技術マニュアルにより、択伐施業技術の向上や将来的な原木の確保が進むなど、自伐施業が軌道に乗っており一定の成果を發揮したと考えています。

イ) 学生が参加する苗木づくりと植樹活動について

ウバメガシ苗木の植樹とコンテナ苗づくりを高校生と小学生の合同で実施したことで、より一層理解が深まり思い出にも残る良い体験になり、地域の伝統産業と持続的な利用について広く普及できたと考えています。今

後も、この活動を引き続き実施していきます。

また、自動灌水装置の設置については、苗畑に行く時間的制限がなくなることで世話役の手間と負担を大きく軽減できました。その分、除草、施肥、防虫などを実施することができました。特に、気温が上がって培土の水分が失われやすい夏期は、寒冷紗と併せて使用することで効果が發揮され、世話役の熱中症回避にもなりました。

(3) 課題

地域の産業として持続的に活動していくためには、備長炭生産に向けた新たな就業者の確保と育成(生産する人材)が必要と考えます。

3 今後取組むべき内容

① 具体的手法又は検討方向

新たな就業者の確保及び育成を図るため、県補助事業を活用した、就業に向けた研修生の支援及び育成状況の確認等の伴走支援を実施します。

②理由

備長炭は黒炭と違い製炭技術の習得により多くの時間と経験を要するため、その間に発生する交流費用や生産資材費用だけでなく、生活面における費用も無視できない問題となっているためです。

③期待する成果

就業に向けた支援を行うことで、意欲と能力のある方々が製炭技術を習得し、定着することで新たな生産者となり、組合としての生産量増加や安定した供給体制の構築が図られること期待しています。



苗木づくりと植樹活動